

特集「中国・台湾における装いの境界領域」によせて

宮脇 千絵*

本特集は、現代中国および台湾を事例に、装いを通じたエスニシティの表象とその揺らぎに着目し、その境界領域にあらわれる「民族衣装」の様相を明らかにするものである。人々の装いは、国籍や民族アイデンティティ、ジェンダー、信仰といった着用者の属性を視覚的に提示し、集団の境界線を可視化する役割を果たす。しかしながら、近年のグローバリゼーションや観光開発、ファッション産業との接続といった動きは、これらの境界線を曖昧にし、新たな意味づけをもたらしている。

とりわけ中国と台湾においては、「民族衣装」と呼び得るものが文化資源として再評価される一方で、その真正性や民族集団との結びつきが変容しており、「エスニック性」のあり方がきわめて流動的になっている。そこで本特集では4本の論考を通じて、中国・台湾を事例とした装いの境界領域において、「民族衣装」がどのようにあらわれてくるのかを視覚優先、真正性、越境という3つの観点から検討する。

そこから浮かび上がってきた「民族衣装」の様相は次のようなものである。第一に、衣服の素材や技法、着用の文脈といった社会的・文化的背景を捨象する傾向にある中国での、視覚優先で捉えられる「民族衣装」のすがたである。第二に、本物・偽物、真正品・類似品という対立軸では捉えられない、人びとの揺れ動く実践と、可変的な文化資源として再編・活用される「民族衣装」である。第三に、観光の文脈においては異文化の象徴として再編されたすがたとしての「民族衣装」が浮かび上がってくる。少数民族・原住民とされる人びとのエスニシティがいかに装いとして表象されるのか、中国・台湾はその境界領域に多様な営みがみられる地域だといえよう。

キーワード

装い、境界領域、エスニシティ、中国・台湾

* 南山大学

I はじめに

本特集は、現代中国および台湾を事例に、装いを通じたエスニシティの表象とその揺らぎに着目し、その境界領域にあらわれる「民族衣装」の様相を明らかにするものである。人々の装いは、国籍や民族アイデンティティ、ジェンダー、信仰といった着用者の属性を視覚的に提示し、集団の境界線を可視化する役割を果たす。しかしながら、近年のグローバリゼーションや観光開発、ファッション産業との接続といった動きは、これらの境界線を曖昧にし、新たな意味づけをもたらしている。

とりわけ中国と台湾においては、「民族衣装」と呼べるものが文化資源として再評価される一方で、その真正性や民族集団との結びつきが変容している。観光やさまざまなイベント、ファッションショー、人びとが気軽にアップロードできるようになった SNS といった文脈で披露される「民族衣装」は、必ずしも特定の民族と一対一で対応するわけではない。また、それ自体にもデザインや素材の変更がなされるなど、「エスニック性」のあり方がきわめて流動的になっている。

本特集では、装いにおける「境界領域」をキーワードに、エスニシティと装いの関係がどのように構築され、いかに再構成されているかを考察する。ここでいう境界領域とは、衣服のデザイン、素材、用途、文脈が交差し、多義的な意味を持つ場であり、それを製作、着用あるいは消費する人がエスニシティをどのように意味づけ、位置づけるのかという実践が繰り広げられる場である。

本特集は4本の論考から構成される。これらを通じて装いの境界領域には、国家、産業、個人、文化といった複数のアクターによるせめぎ合いが存在すること、そしてその揺らぎのなかにこそ、現代の装いとエスニシティの相互作用による「民族衣装」のすがたが浮かび上がることを明らかにする¹。

II 装いにおける境界領域

装いは、その人がどのような人であるのかを即時的

に示すものである。言い換えると、人間をあるまとまりのある集団として区切り、可視化させる機能を持つ。例えば通過儀礼のような人生の節目に現れる装いやライフステージに伴って移り変わる装い、女性と男性を示す装い、宗教や信仰を示す装い、また職業や立場を表す装いなどが挙げられよう。「民族衣装 (ethnic dress)」や「国民衣装 (national dress)」と称される装いも同様に、その着用者がどのような民族・国家的帰属を持つのかを示すものである²。このように、装いとは、個人が社会においてどのように位置づけられているのかを自他ともに知らせるものであるといえよう。

A・ファン・ヘネップは、人生という時間の流れに人為的な区切りを設けることが多くの社会でみられると指摘し、その節目に行われる儀礼を通過儀礼と呼んだ。出生、成熟（成人）、婚約・結婚、妊娠・出産、死といった人生の諸段階で行われる通過儀礼は、日常から「分離」し、非日常な「過度」期を過ごし、再び日常へと「(再)統合」という3つの局面から成る（ヘネップ 1977）。この通過儀礼のプロセスでは、装いの変化がみられることが少なくない。例えば子どもから大人へ、未婚から既婚へ、生から死へと社会的ポジションを更新する際に外見を変化させることで、人は社会における自己の位置づけを新たにするのである。

ただし、通過儀礼にみられるようなライフステージにおける時間の区切りと、その移行を示す装いは一度変更されたら基本的に元には戻らない。それに対し、人間の集団に区切りをつけるような装いに関しては、その線引きは自明なものであるようで文化的・社会的に構築されたものである。そして、このような集団の境界線が決して固定的なものでないように、それを示す装いにも揺らぎがみられる。いくつか事例を挙げてみよう。

まず性別の境界における装いの役割である。中世ヨーロッパ以降、脚衣（ズボン）とスカートといった形態の分化により、性差による装いが大きく分け隔てられてきた。特に19世紀以降の男性スーツの普及は、哲学者のフリーゲルが「男性の大きいなる美の放棄」

¹ 本特集は南山大学人類学研究所の共同研究「装いの境界領域に関する人類学的研究」（2022～2024年度）の成果である。

² ただし「民族衣装」と「国民衣装」は明確に区別できるものではない。近代の国民国家のネイション（nation）の概念は、国家、国民、民族と多義的な意味を持ち、ある民族が国家形成の主体となっている場合、それは国民とほぼ同義であり、両者がほぼ同じものとしてあらわれるからである（宮脇 2022: 126）。

と評したように、装飾を排除し、機能性と無彩色を志向することで、公共空間における男性の規範的装いを定着させた。それに対して、女性は華やかさや装飾性を担われ、地域社会や家庭内における「伝統」や「文化」の体現者としての役割を背負わされることとなった（ロス 2016）。

このような性別に基づく装いの区分は、生物学的性差に即しているように見えるが、実際には社会的に構築されたものであり、現在ではその枠組みに対する疑義が高まりつつある。ランドセルの色の多様化や、アパレル業界におけるジェンダーレス商品の拡大は、装いが必ずしも二項対立的な性別によって規定されるものではないという認識の広がりを見せている（cf. 西條 2022）。装いの境界はもはや「自然なもの」として受け入れられるのではなく、歴史的・文化的に形成された「可変的な構造」として問い直されているのである。

またこのような装いにおける境界線の揺らぎは、他者からの介入による影響も大きく受ける。例えばムスリム女性が着用するヴェールに関しては、国家の政策や国際世論の動向、人びとの解釈の移り変わりによっていかに着用するのか、そもそも着用すべきか否かが常に議論の焦点となってきた。イスラームの聖典クルアーンには、女性の外見的な美しさを隠す必要性こそ説かれてはいるものの、その隠さなければいけない「女性の美しさ」が身体のどの部分を指すのか、それをどのような形態で覆うべきなのかについては詳細な記述がないからである（野中 2022: 151）。そのため、ヴェールの色や形、着用方法には多様な解釈が存在し、地域や時代によってそのあり方は大きく異なる。

ムスリム女性のヴェールについては、イランやエジプトのように国家が宗教的服装を制限する地域がある一方で（cf. 後藤 2018）、インドネシアではファッション産業との結びつきがみられ、政府もそれをクリエイティブ産業として推進してきた（野中 2015）。SNS 上では、スタイリッシュなヴェールの巻き方やコーディネートが若年層女性に支持され、自己表現と信仰実践の双方を内包する新たな装いの形が模索されている。このような動きは、装いが個人の選択であると同時に、国家・市場・地域社会といった複数の力の影響下にあること、またそれらから時に過剰ともいえる介入を受けることを示している。一見すると個人的な実践であるように見える装いは、自分を取り巻くさまざまなレベルでの社会との駆け引きのうで成り立っているの

である。

このように装いにおける境界領域は、単にそれを身につける者が「どちらの集団に属するのか」を決定する線引きを指すのではない。むしろそこは、属性・制度・アイデンティティといった複数のコードが交錯し、常に意味が生成され続ける動的な空間であるといえよう。このような境界領域において、エスニシティと装いはいかに交渉されているのだろうか。以上が、本特集を貫く関心である。

III 中国・台湾というフィールド

文化人類学において布や衣服は、長らく日常的な実践や地域的文脈の中で捉えられてきた。特に自家消費のために製作される手仕事としての布は、社会的な意味の生成や伝統の維持と密接に結びついており、研究者はそれがグローバルな生産・流通・消費のネットワークに接続されることで、いかに変容するのかを考察してきた。特にアジアにおいては、ファッション産業と接続することで、ローカルな布や衣服に西洋のオリエンタリズムが反映され、消費される様子が批判的に検討されてきた（Nissen, Leshkovich and Jones (eds.) 2003）。また、非西洋圏における独自のファッションシステムの構築に関する議論や、文化的真正性と市場との関係から西洋中心なファッション概念の再考を促す研究が蓄積されてきた（Jensen, and Craik (eds.) 2016; Nakatani (ed.) 2020）。

中国では改革開放政策が本格化し、世界経済に門戸を開き始めた1980年代以降にファッションの概念が広まったことで、布や衣服が西洋由来で市場経済と不可分なファッション産業と結びつくようになり、分析の俎上に上がるようになった。実際に、中国出身のファッションデザイナーの活躍により国際的なマーケットが急激に成長している（Tsui 2010）。ただしそこで議論の中心となるのは少数民族の装いではなく、満州族（当時「旗人」と称されていた人びと）や漢族などその時代の為政者の装い、すなわち「旗袍（いわゆるチャイナドレス）」や毛沢東スーツ（Mao suit）、そこから創造された「唐服（中国風の衣服）」などである。そこでは、それらがどのような歴史的変遷を辿り、国家を表象するファッションとして創造され始めているかが論じられる（Wu 2009; Zhao 2013; Ling & Reinach (eds.) 2018）。このような議論の特徴は、為政者の装いには歴史があるという視点および時流とと

もに変容している様子、つまり時間的変化があるものとして描かれている点である。それに対し少数民族の装いは、地域や文化に根ざしている「伝統」だと捉えられるがゆえに、ファッションと結びついて国際的に流通するものとはみなされず、このような議論の対象となつてこなかった。

このような視点から本特集で注目するのが、中国・台湾の「民族衣装」である。本稿では「民族衣装」を中国少数民族および台湾原住民の装いを指すものとする。「民族衣装」は民族集団への帰属を示す服と見なされるが、それは決して自明のものとして存在しているわけではない。その多くは自然環境や文化的背景に基づいて育まれてきた伝統的な服をベースとしながらも、それまで接することのなかった他者との出会いを契機に、自分たちが何者なのか、他の集団とどう異なっているのかを意識するときにあられる状況依存的な服だといえるからである（宮脇 2022: 123）。

しかしながら中国では「民族」の概念が、台湾では「原住民」の概念が、政策的にも文化的にも強い存在感を持っており、少数民族・原住民の装いは単なる文化表現ではなく、国家による民族カテゴリーの構築や多文化主義の推進といった動きと深く結びつくことがある。中国と台湾というフィールドは、国家政策や市場の論理、民族カテゴリーの在り方を浮かび上がらせると同時に、布や衣服をめぐる装いの実践がいかに多様で、かつ動態的であるかを示すものである。中国・台湾を事例とした装いの境界領域において、「民族衣装」がどのようにあらわれてくるのか、本特集では視覚優先、真正性、越境という3つの観点から検討する。

1 視覚優先の「民族衣装」

中国では、1950年代以降に展開された民族識別工作によって、国家が認定する形で56の民族が制度的に定められた。これは単なる分類ではなく、民族カテゴリーを固定化し、国家の枠組みの中に再構築する試みでもあった。そのプロセスから中国の民族には「創られた」側面が認められる点が議論されてきた。ただし中国の社会学・人類学者である費孝通は「中華民族の多元一体構造」において、民族は常に変動しうるものだと述べており（費 2008: 54）、民族カテゴリーは必ずしも本質主義的なものではない。

しかしながら、装いは民族を視覚的に識別・表象するための記号として機能するようになった。実際に、中国における「民族衣装」は少数民族を象徴する要素

として扱われ、国家イベントや展覧会、写真集などで強調されてきた。その際、装いは単に文化の一部として紹介されるのではなく、民族らしさを視覚的に提示する手段として整理されていく。例えば1950年代以降に全国で実施された民族識別調査に加え少数民族言語、少数民族社会歴史調査の報告書となる『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊』シリーズにも服飾に関する記述は見られる。ただそれは衣服の色、サイズ、模様、形態の説明にすぎず、この時代、服飾は当地の人びとのエスニシティを区別するための指標として描かれた（cf. 『中国少数民族社会歴史調査資料叢刊』修訂編纂委員会（編）2009）。

また1952年に設立された上海戯劇学院舞台芸術科では、少数民族地域での調査を行いながら衣服と装飾品の研究が進められた。時代を経て、1984年末に上海対外貿易公司から、東京で中国少数民族の衣装と服飾装飾品の展覧会を開きたいので、デザイン画を描いてほしいとの依頼があり、学院によって112点が描かれた。その展覧会が1985年に新宿 NS ビルで開催された。その後これを出版する運びになり、500枚以上のイラストと200枚以上の写真を掲載する写真集となった（Wang 1986）。これは55の少数民族に漢族がプラスされた56民族を網羅した内容となっており、民族ごとに独自の装いをした男女が描かれたイラストと、それぞれに民族の居住地域や人口、文化的背景、衣服の特徴といった短い解説が添えられている。ただし、このような民族紹介や衣服解説からは、衣服や装飾品の制作に関する知識や技法、着用まつわる社会的規範、時代による文様やスタイルの変化といった、衣服と関わる人の営みや実践を読み取ることはできない。

さらに中国は、同一民族内のバリエーション豊かな衣服を細かく分類することに傾倒していく。北京の民族文化宮が1984年に開催した《中国苗族服飾展》に併せて、写真集『中国苗族服飾』が中国語と英語で出版された（民族文化宮（編）1985）。民族文化宮では1981年以降、何度もミャオ族居住地域に調査に行き、大量の衣服を収集した。この本ではそれらを地域に基づき5型21式に分類し、それぞれに豊富なカラー写真やイラストを添えている。人口約1000万人のミャオ族は地域ごとに百種類以上の衣服を持つと言われるほどだが、本書では地域を基準とした細かい分類が行われている。

また同じく民族文化宮で1987年秋に《中国彝族服飾展》が開催された際にも、貴州、四川、雲南各省で

の調査、収集を踏まえて『中国彝族服飾』が出版された。広範な地域に居住する彝族の衣服が地域ごとに6型16式に分類され紹介されている(石嵩山(主編)1990)。このように、これらの展覧会や書籍では、ミャオ族や彝族の内部にも多様な衣文化があることが明らかにされるのと同時に、それらを地域という括りで細かく分類していく方法が取られていることが分かる。これ以降、少数民族の装いは地域やスタイルの差異という括りで分類することが主流になっていく³。そこでは、実際の着用者による実践や技法の継承といった側面はしばしば省かれ、視覚的特徴による民族(下位集団)間の区別が優先されてきた。

本特集で佐藤が描くのは、中国が少数民族およびその装いに対してとってきた態度が変遷していく様相である。中華人民共和国成立後の初期の段階では、少数民族の衣服が民族文化のひとつとして理解すべきものとして捉えられるようになったのと同時に、衣服をはじめとした民族的な異質性が不適切なものと捉えられるという矛盾した対応が共存していた。そのため、衣服そのものではなくそこに施された図案に関心が寄せられた。少数民族の衣服をテーマとした展覧会も増加したが、そこで展示されたのは、図案をもとに美術工作者によって創作された工芸美術作品が主であったという。1980年代以降には、「民族衣装」そのものに対する関心が高まっていくが、それ以前の段階では、社会主義的な風潮のなかでの革命性を帯びた創作活動に、「民族衣装」の図案がインスピレーションの源泉として使用されていたのである。

衣服は本来、素材、技法、デザイン、着用の文脈などの複雑な要素が集合して成り立つものである。しかし、社会的・文化的背景、着用者の経験や知識などを切り離し、「民族衣装」を視覚優先で定義しようとするような傾向が、エスニシティの固定化や技法の周縁化を引き起こしているといえるのではないだろうか。

2 「民族衣装」の真正性

布や衣服が地域や国家の境界を越えてグローバルに流通、消費される際に、地理的・文化的に遠く離れた

生産者と消費者を結びつけるために中心的な役割を果たしているのが「真正性(authenticity)」という概念である(Nakatani 2020: 11)。真正性は、使用される素材や技法、そして文化的背景といった要素によって裏付けられることが多い。それに対し、中国においてはこのような真正性が重視されない、あるいは問われない傾向にある。視覚的差異によって民族集団を区別する記号としての機能が優先されてきたため、表層的なデザインやモチーフが強調されるからである。

このような視覚優先の「民族衣装」は、ファッション産業との接続を通じて新たな展開をみせている。例えば雲南省では、省都の昆明市で2019年と2020年に「絲路雲裳・七彩雲南2019民族賽装文化節」、「絲路雲裳・七彩雲南2020雲上民族賽装文化節」と題した少数民族の装いをテーマにしたイベントが開催された。2021年には「絲路雲裳・七彩雲南2021昆明民族时装周(民族ファッション・ウィーク)」と名称を変え、民族文化イベントからよりファッション色を強めたものへと移り変わった。ランウェイでは、雲南省各地でのコンテストを経て選ばれた「民族衣装」がお披露目されるほか、ファッションデザイナーによる民族文化を活かした新規的な衣服が紹介される。翌2022年の開催を伝える記事では、「会場では民族衣装、ファッションブランド、デザイナーが共演し、衣服の美しさを競い合う。これによって、雲南の服飾産業とファッション産業の融合がさらに促進され、雲南文化産業の発展と転換に新たなチャンスをもたらす」と紹介されている⁴。

新たにデザインされ、ファッションショーで披露される「民族衣装」は、染織や刺繍などの技法や天然素材を使用しているわけではなく、少数民族のデザインやモチーフを使用することで、創造的なファッションへと展開されたものである。このような傾向は、真正性を本物／偽物という対立軸で捉えるのではなく、可変的な文化資源として再編・活用する動きとして理解できよう。

政府主導の観光開発が進むなか、中国国内の観光研究の分野では、文化の商品化を批判するだけでなく、

³ ミャオ族の衣服に関しては、楊正文『苗族服飾文化』(1998)では59種、吳仕忠(編)『中国苗族服飾図誌』(2000)では173種に分類されている。これらの書籍は、方言や居住地域の違いに基づいた「型」を分類の基本単位としている、性別、年齢、婚姻状況は使用場所の違いは「型」の下位分類としてあらわれる、服装のスタイル、着た時の特色、典型的な染織、刺繍の技法や文様の内容を紹介している、という3点が共通する。

⁴ 「盛装中国 美美与共2022民族賽装文化節盛大開啓」中国日報網、<https://yn.chinadaily.com.cn/a/202211/19/WS637846b5a3109bd995a50dfe.html> (最終閲覧2025年3月1日)

文化保護と観光開発の矛盾を解決する方法を探索することとなった。田中によると、文化の商品化に対しては二つのアプローチがある。ひとつは、文化保護には資金が必要なため、文化の商品化は必ずしも悪いことではなく、伝統文化と観光の持続的な発展の道を提供すると論じるもので、もうひとつは、文化の商品化をホスト社会の人々の市場に対する積極的なふるまいとするものである。この姿勢からは、中国国内の研究者たちが当初から文化を本物／偽物の二項対立では認識していないことが明らかとなる（田中 2024: 249）。中国国内の民族文化に関する議論においても、この後者の姿勢が強く、真正性の有無を問題にするよりも、文化がいかに創造的に再利用されているかに注目が集まっている（cf. 姚2011; 雷・項2014; 呉2016）。

このような真正性への構造主義的アプローチは、「民族衣装」にも通底している。本特集で謝黎が明らかにするのは、伝統かファッションか、真正か否かという二項対立では収まらない「民族衣装」を応用した現代中国ファッションのあり方である。謝黎は現代中国ファッションに応用される「民族的な要素」とその記号的意義を、記号圏論とパースの三項関係理論を用いて考察する。「民族衣装」は素材の軽量化や装飾の簡略化を経て変容し、SNSや観光を通じて再構築されている。論考では、個別民族と中国全体を表す記号性の関係を、「境界性」「不均質性」「対話性」という観点から明らかにする。

それに対して、台湾の事例を示すのが田本の論考である。本特集のもとになった研究会では、民族文化からモチーフを「借用」することが問題視されない中国とは対照的に、台湾では知的財産制度のもとで人びとの実践が揺れ動くさまが確認された。それを踏まえ田本は、台湾におけるエスニック商品の生産・流通と、知的財産制度下で問題視される「類似商品」、それに関わる仲介者の位置づけを検討する。1990年代以降、先住民文化の再評価とエスニック商品の普及が進む一方、政府は知的財産権保護を強化し真正品と類似品を区別しようとした。しかし、現場の人々はこの区別を共有しておらず、ブランド／フェイク、本物／偽物の二分法では捉えきれない実態があることを人類学的視点から明らかにする。

ファッションと結びつき、商品として流通するようになった「民族衣装」は、もはや「過去を正確に再現するもの」ではなく、「現在の価値に即して再編されたもの」として消費されているといえよう。

3 越境する「民族衣装」

他方、「民族衣装」は国家や文化の境界を越えてコレクションや鑑賞の対象となってきた。先述した北京の民族文化宮の《中国苗族服飾展》や《中国彝族服飾展》は、日本、アメリカ、フランス、旧ソ連、香港などに巡回し、国外での評判を高めた（段 2004: 375）。

台湾・輔仁大学の織品服装研究所・中華服飾文化中心では、1988年から貴州省のミャオ族衣装を収集し、現在では2000点を超える大規模なコレクションを誇る。同研究所がこうした収集に注力するきっかけとなったのは、民族文化宮による『中国苗族服飾』（1985）の出版に触発され、紋様やろうけつ染めといったミャオ族の服飾文化の資料化と研究の必要性を強く認識したことによる（国立歴史博物館編輯委員会（編）1999: 27）。

このような「民族衣装」のコレクション化・展示化の流れは、他にも大英博物館に収蔵されている貴州省のミャオ族の衣服を中心としたコリガン・コレクション（コリガン 2003）や、台湾の長河芸術文物館（Evergrand Art Museum）の収蔵品を基にしたハワイ大学美術館での《Writing with Thread: Traditional Textiles of Southwest Chinese Minorities》展（2008年）（University of Hawaii Art Gallery (ed.) 2009）、さらには香港大学美術博物館で開催された《針情線韻：中国少数民族服飾与背帯》展（2013年）（李・羅（編）2013）などにも見ることができる。このような展示は、「失われつつある少数民族の固有の文化、職人技、独自の素材や生産方法を保存、共有すること」（李・羅（編）2013: 36）を目的としている。国家や文化の境界を越えて博物館のコレクションとなることは、収集された時点でそのモノの時間の流れを止めることを意味し、「伝統」という価値を強調することに繋がる。

一方で、コレクションや鑑賞とは異なる文脈においても、「民族衣装」は国境を越えて流通している。とりわけ観光の文脈においては、「民族衣装」が異文化の象徴として再構成され、消費の対象へと転換してきた。宮脇は、タイ・チェンマイで観光のみやげものに加工される山地民の手仕事の多くがモン（中国のミャオ族）由来である理由を考察し、衣服が遠方で消費される意味を探る。1970年代以降、チェンマイでは山地民の古着需要が高まり、中国雲南省文山から古着が供給された。本稿はその収集・流通プロセスを仲介者の実践から明らかにし、モンの古着が多く用いられる要因を論じるとともに、古着が文化的レポジトリとな

る可能性を指摘する。

博物館によるコレクションが「民族衣装」を過去の
ある時点に留めようとするのに対し、観光の文脈にお
いては「民族衣装」が流動的な性質を帯びていること
が示される。ここに、文化の内・外、自己・他者、保
存・消費といった対立軸のあいだで揺れ動きながら、
その境界を一時的に曖昧にする「民族衣装」があらわ
れるのである。

IV おわりに

本特集は、中国および台湾を事例に、装いを通じた
エスニシティの表象とその揺らぎに注目するものであ
る。装いは国籍や民族アイデンティティ、ジェンダー、
信仰といった着用者の属性を可視化するものだが、近
年のグローバル化や観光開発、ファッション産業との
接続などの影響によりその境界が曖昧になり、新たな
意味づけをもたらしている。一方で装いは国家や民族、
宗教、性別などの規範にも左右されるものであり、一
見個人的な実践であるようで、社会との相互作用のな
かで成り立つ。「自分が何者なのか」を自他ともに知
らしめる装いはこのような揺らぎのなかでどのように
あらわれてくるのか。このような問いのもと、本特集
では、中国少数民族および台湾原住民の装いである「民
族衣装」に焦点を当て、境界領域においてエスニシティ
と装いがいかに交渉されているのかを検討する。

本特集で明らかにする境界領域から浮かび上がって
くる「民族衣装」の様相は次のようなものである。第
一に、衣服の素材や技法、着用の文脈といった社会的・
文化的背景を捨象する傾向にある中国での、視覚優先
で捉えられる「民族衣装」のすがたである。第二に、
ファッション産業との結びつきによる商品としての
「民族衣装」の真正性のあり方である。中国では視覚
優先であるがゆえに、素材や技法、文化的背景といっ
た要素に真正性が求められない。そのため民族集団を
区別する記号としての機能が高まり、ファッション産
業との融合が積極的に図られてきた。そこでは本物と
偽物という対立軸では捉えられない、可変的な文化資
源として再編・活用される「民族衣装」が浮かび上が
ってくる。対して台湾では、知的財産制度のもとで真正
品と類似品を区別しようとする動きがありつつも、そ
の二分法では捉えきれない人びとの揺れ動く実践とそ
れに伴ってあらわれる「民族衣装」のあり方が確認さ
れる。第三に、国家や文化の境界を越える流通を伴う

動きである。博物館コレクションを目的とした越境が、
衣服の時間の流れを止め、「伝統」を強調するのに対し、
観光の文脈においては異文化の象徴として再編された
すがたとしての「民族衣装」が浮かび上がってくる。

本特集は中国・台湾に焦点を当てたものだが、これ
らの地域における「民族衣装」のあり方がとりわけ特
殊であると主張することを目的としているわけではない。
布や衣服、装いの文化への関心、そしてファッショ
ンという現象との接続や対比の分析は、先行する諸研
究との対話のうえで成り立っている。しかし長らく中
国少数民族のもとでフィールドワークをしてきた筆者
にとって、あらゆる文化的場面で表出する漢族・少数
民族、国家・民族の対比の枠組みは、時代に応じて少
数民族の装いに大きな影響を及ぼし、「民族衣装」を
象る要因となってきたことを感じざるを得なかった。
世界各地でみられる手仕事としての布や衣服がグロー
バルに展開し、ファッションと融合して流通し、消費
されるプロセスに個別の特徴があるとすれば、中国・
台湾は少数民族・原住民とされる人びとのエスニシ
ティがいかに装いとして表象されるのか、その境界領
域に多様な営みがみられる地域だといえよう。

参考文献

(日本語文献)

後藤 絵美

- 2018 「ニカーブをまとうまで——装いの選択と拮抗す
る「社会」『装いと規範——現代におけるムスリ
ム女性の選択とその行方』帯谷知可・後藤絵美
(編)、pp. 7-14、京都大学東南アジア地域研究研
究所。

コリガン、ジーナ

- 2003 『中国ミャオ族の織 (大英博物館ファブリックコ
レクション)』近藤修 (訳)、デザインクエスト。

西條 玲奈

- 2022 「ジェンダー」『ファッションスタディーズ——私
と社会と衣服の関係』蘆田裕史・藤嶋陽子・宮脇
千絵 (編)、pp. 81-93、フィルムアート社。

田中 孝枝

- 2024 「観光——ホスト／ゲストからツーリズム・モビ
リティへ」『中国民族誌学——100年の軌跡と展
望』河合洋尚・奈良雅史・韓敏 (編)、pp. 245-
258、風響社。

ヘネップ、アルノルト・ファン

- 1977 『通過儀礼』綾部恒雄・綾部裕子 (訳)、弘文堂。

野中 葉

- 2015 『インドネシアのムスリムファッション——なぜ

- イスラームの女性たちのヴェールはカラフルになったのか』福村出版。
- 2022 「宗教と衣服」『ファッションスタディーズ——私と社会と衣服の関係』蘆田裕史・藤嶋陽子・宮脇千絵（編）、pp. 149-155、フィルムアート社。
- 費 孝通
- 2008 『中華民族の多元一体構造』西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人（訳）、風響社。
- 宮脇 千絵
- 2022 「民族衣装」『ファッションスタディーズ——私と社会と衣服の関係』蘆田裕史・藤嶋陽子・宮脇千絵（編）、pp. 122-128、フィルムアート社。
- ロス、ロバート
- 2016 『洋服を着る近代——帝国の思惑と民族の選択』平田雅博（訳）、法政大学出版局。
- （英語文献）
- Jensen, M. Angele and Jennifer Craik (eds.)
- 2016 *Modern Fashion Tradition: Negotiating Tradition and Modernity Through Fashion*. London: Bloomsbury.
- Ling, Wessie & Simona Segre Reinach(eds.)
- 2018 *Fashion in Multiple Chinas: Chinese Styles in the Transglobal Landscape*. London: Bloomsbury.
- Nakatani, Ayami
- 2020 Introduction: Asian Handmade Textiles as Fashionable Traditions. In *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*. Ayami Nakatani (ed.), pp. 1-16. London: Lexington. Books.
- Nakatani, Ayami (ed.)
- 2020 *Fashionable Traditions: Asian Handmade Textiles in Motion*. London: Lexington. Books.
- Nissen, Sandra, Ann Marie Leshkovich & Carla Jones (eds.)
- 2003 *Re-Orienting Fashion: The Globalization of Asian Dress*. Oxford: Berg.
- Tsui, Christine
- 2010 *China Fashion: Conversations with Designers*. Oxford: Berg.
- University of Hawaii Art Gallery (ed.)
- 2009 *Writing with Thread: Traditional Textiles of Southwest Chinese Minorities*. Hawaii: University of Hawaii Art Gallery.
- Wang, Fu Shi
- 1986 *Ethnic Costumes and Clothing Decorations from China*. Hai Feng Publishing Co., Sichuan People's Publishing House.
- Wu, Juanjuan
- 2009 *Chinese Fashion: From Mao to Now*. Oxford: Berg.
- Zhao, Jianhua
- 2013 *The Chinese Fashion Industry: An Ethnographic Approach*. London: Bloomsbury.
- （中国語文献）
- 段 梅
- 2004 『東方霓裳——解説中国少数民族服飾』北京：民族出版社。
- 国立歴史博物館編輯委員会（編）
- 1999 『苗族服飾特展——黔东南』台北：国立歴史博物館。
- 雷 麗・項 正文
- 2014 「苗族伝統蜡染の現状と保護対策」『文山学院学報』27(1): 27-30。
- 李 美賢・羅 諾徳（編）
- 2013 『針情線韻——中国少数民族服飾与背帯』香港：香港大学美術博物館。
- 民族文化宮（編）
- 1985 『中国苗族服飾』北京：民族出版社。
- 石 嵩山（主編）
- 1990 『中国彝族服飾』北京：北京工芸美術出版社。
- 吳 化雨
- 2016 「論苗族蜡染的技芸特征——以雲南文山苗族地区為例」『雲南民族大学学報（哲学社会科学版）』33(3): 133-137。
- 吳 仕忠（編）
- 2000 『中国苗族服飾図誌』貴陽：貴州人民出版社。
- 楊 正文
- 1998 『苗族服飾文化』貴陽：貴州民族出版社。
- 姚 鐸
- 2011 「“刀尖上的絵画”——論雲南文山苗族蜡染工藝的保護与伝承」『新西部』6: 47, 24。
- 《中国少数民族社会歴史調査資料叢刊》修訂編纂委員会（編）
- 2009 『雲南苗族瑶族社会歴史調査（中国少数民族社会歴史調査資料叢刊（修訂本）129）』北京：民族出版社。

An Anthropological Study of the Liminal Spaces of Dress in China and Taiwan

Chie MIYAWAKI*

This special issue focuses on contemporary China and Taiwan, exploring how ethnicity is both represented and destabilized through clothing, particularly through the forms that “ethnic dress” takes in liminal spaces. Dress serves as a visual expression of identity, including national, ethnic, gendered, or religious, and marks visible group boundaries. However, recent forces such as globalization, tourism, and the fashion industry’s integration have blurred these boundaries and reshaped meanings.

In both China and Taiwan, so-called “ethnic dress” has been redefined as a cultural resource, even as its authenticity and ties to specific ethnic groups have become increasingly fluid. Through four case studies, this issue examines how “ethnic dress” appears in these boundary zones from three main perspectives: visual primacy, authenticity, and cross-border flows.

Three key dimensions emerge from this analysis. First is the visually-driven understanding of ethnic dress in China, which often abstracts the cultural and social contexts of materials, techniques, and modes of wearing. Second is a practice-based, fluid interpretation of ethnic dress as a reconfigured cultural asset, one that resists binaries such as authentic or fake and original or imitation. Third is the influence of tourism, where ethnic dress is reimagined as a symbol of otherness. China and Taiwan provide rich sites where diverse practices converge in the visual representation of minority and Indigenous ethnicities.

Keywords

dress, liminal spaces, ethnicity, China and Taiwan

* Nanzan University